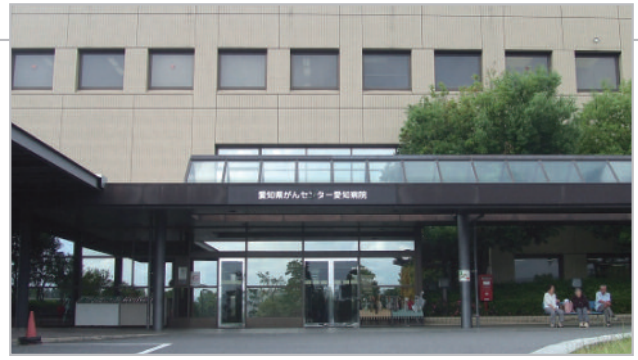


愛知県がんセンター 愛知病院



「TANDBERGのビデオ会議システムは へき地医療を支える重要なコミュニケーションツールです」

TANDBERGの導入範囲

愛知県がんセンター愛知病院および山間部、離島に渡る9つのへき地診療所と拠点病院

導入ソリューション

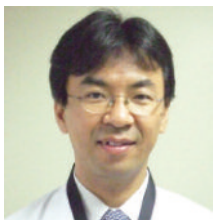
TANDBERG Set-topシリーズ 880 9台
TANDBERG Set-topシリーズ 990 1台
TANDBERG MCU 16+16

TANDBERGの選択理由

- IP接続のみならずISDN網にも対応する必要があったこと
- 費用的な負担をかけずにMCU1つでいつでも多地点接続ができる拡張性
- 写真や資料などのデータの共有ができるDuo Videoという機能

導入効果

「ビデオ会議は互いの顔が見られて、距離感がないところが利点です。診療所勤務の医師が1人の場合、同じ問題で悩んでいる医師や先輩医師とざっくばらんに話し合うことで、問題が解決することのほうが多いのです。TANDBERGのビデオ会議システムは重要なコミュニケーションツールと位置づけられています」



愛知県がんセンター愛知病院
地域医療支援室長
総合内科部内科診療科医長
橋本淳 氏



へき地医療支援機構 専任担当
健康福祉部健康担当 医務国保課
新城保健所地域保健課 主査
愛知県がんセンター愛知病院
総合診療科技師 木村里紗 氏

愛知県がんセンター愛知病院内のへき地医療支援機構では、2004年よりTANDBERGのビデオ会議システムを導入し、拠点病院およびへき地診療所等と愛知病院、あるいはへき地診療所に勤務する医師同士のコミュニケーションを図っています。

山間部や離島などへき地での医師不足は深刻な問題です。各都道府県では「へき地医療支援機構」などを設立し、拠点病院からへき地診療所への「医療従事者派遣の調整」、「無医地区への巡回診療」、「へき地医療研修会の運営」を実施し、医師不足対策に取り組んでいます。そのような医療現場で、愛知県へき地医療支援機構はTANDBERGのビデオ会議システムを活用して、①活動の効率化、そして、②医師同士のコミュニケーションの円滑化、を図っています。

へき地診療所には、医学部を卒業した後、都市部の総合病院で2年間の初期臨床研修を終了した若い医師が1人で赴任することがほとんどです。多くの愛知県のへき地診療所でも、経験の浅い医師1人または2人と2、3名の看護師やスタッフが勤務しており、医師らは診断、そして、患者への対応の仕方など、すべてを自分の判断にゆだねられるような環境におかれています。

「いつ急患が入るか分からない状況では皆が集まって意見交換できる良さをいかにさせるビデオ会議の導入が求められました」

そのような医師を支援するため、愛知県がんセンター愛知病院は、定期的に愛知病院の担当医と約10カ所にわたるへき地診療所に勤務している医師たちとが集まって勉強会を行っています。ビデオ会議を導入する前は、新城市作手(つくで)診療所で毎月1回、診療が終わった夜9時から午前1時まで勉強会を開催していました。診療が終わった後の夜間から

深夜にかけての勉強会は効率的ではなく、また、いつ急患が入るか分からない状況下では医師たちに負荷がかかっていました。そのため、愛知病院では、実際に集まらずとも、顔が見られて、皆が集まって意見交換ができる良さを生かせるビデオ会議の導入を決意したのでした。

そこで、愛知病院では1999年、ビデオ会議システムを導入。当時導入したものは基本的に1対1でしかやりとりができず、多地点を同時に接続するためには、別途、事前に多地点接続サービスを申し込まなければいけません。2004年にはシステムをTANDBERGのビデオ会議システムに変更。2006年5月までに、愛知県がんセンター愛知病院を含む各拠点病院と、山間部、離島を含んだへき地診療所の計10拠点での同時接続を実現しました。現在は、隔週でそれぞれにテーマと時間を分けた2種類の定例勉強会を開催しています。ビデオ会議は互いの顔が見られて、距離感がないところが利点です。

「TANDBERGを選んだ理由は、ISDN/IP双方への対応と10拠点同時接続、そして、資料・画像の共有が簡単にできることでした」

TANDBERGを選んだ理由は、へき地なので、IP接続のみならずISDN回線にも対応する必要があったこと、そして、接続先が10拠点にわたるため、費用的な負担をかけずにMCU1つで、いつでも多地点接続ができる拡張性でした。さらに、写真や資料などのデータの共有をし、その場で資料の説明をしたり、議事録を元に話し合いをしたりするために、TANDBERG製品のDuoVideoという資料共有ができる機能は非常に役に立ちました。

現在、愛知県には、7つの拠点病院と9つのへき地診療所があります。へき地診療所はプライマリ・ケアが中心です。最新の診断や治療の



TANDBERG Set-topシリーズ



TANDBERG MCU 16+16
(Multipoint Control Unit: 多地点接続装置)

方法は本やインターネットで調べることができますが、患者個別の問題に対する対応はそうはいきません。医療におけるビデオ会議の利用というと、遠隔診断、遠隔治療というものに目が行きがちですが、へき地医療においては、医療行為そのものより、健康問題を持つ患者が、家族や地域社会の中でどのように生活していくか支援していくことのほうが大切になります。診療所勤務の医師が1人の場合、そうした悩みを、同じ問題で悩んでいる医師同士でざっくばらんに話し合うことで、問題が解決できることのほうが多いのです。そのため、私たちは、ビデオ会議システムを重要なコミュニケーションツールと位置づけて使っています。
(橋本先生)

現在、愛知病院内でビデオ会議システムを使用している範囲は県内のへき地医療機関のみですが、へき地医療支援機構は各県にあり、時々集まって会議をしています。将来的にはビデオ会議を使って、他県の支援機構やへき地医療に関わっている人との勉強会を相互乗り入れでできるようになればと考えています。
(橋本先生)

平成18年ビデオ会議の使用時間は約4000分、TANDBERGのビデオ会議システムに付加されているDuoVideo(ビデオ映像とともに静止画像なども送れる)機能を使用し、214症例において画像転送(資料、レントゲン画像)を行い、送付した画像は428点に及びます。
(橋本先生)

「確信がもてない中、顔をみながら相談できる仲間がたくさんいるのは心強いです。医療とは直接関係のないことも気軽に相談できる感覚がいいですね」

名古屋市内の病院で初期臨床研修を受け、3年目で豊根村診療所へ行きました。研修



決められた時間になると、各診療所の医師が各々の端末からビデオ会議に参加。患者への対応などで途中参加になった場合でも、参加人数に応じてリアルタイムに画面が分割されていく。

期間中は、1人の患者を持って長期間診ることはありませんでしたし、慢性疾患をもつ患者に対し薬の調整などをする機会もありませんでした。初めて診る症例などは、本を見て調べることができますが、週に1度ビデオ会議をつなぎ、先輩や仲間の先生たちとディスカッションしたり、1対1で相談に乗っていただいたりしたことは非常に心強かったです。確信がもてない中、顔を見ながら相談できる相手がいるのとは違うのです。また、へき地診療所の場合、整形外科医が担当すべき患者さんも来れば、内科の患者さんも来ます。ビデオ会議でつながる先生の中にはそれぞれ専門の方もいらっしゃいます。個別に電話してでもいいのですが、みんなが集まって相談し合えば、他人の相談内容を聞くことができ、それが勉強になるのです。医療現場とは別になりますが、女医が増えている中、自治医科大が定めるへき地勤務の義務年限は9年間で、その期間、どのように結婚、子育てなどされているのか、医療とは直接関係のないことなどでも情報を交換できると嬉しいです。(木村先生)

※ ※ ※

今回は、西日本電信電話株式会社(NTT西日本)、エヌ・ティ・ティ・アドバンステクノロジー株式会社(NTT-AT)に多大なるご協力をいただき、導入となりました。

「愛知病院様と接続される山間部や離島にある拠点ではIP網とNTT西日本の提供するBフレッツ・フレッツADSL網が利用されているため、双方で利用できるTANDBERG製品を選定しました」(NTT西日本 名古屋支店)

